

## あとがき

研究代表者 高城 玲

アチックフィルム・写真は、渋沢敬三を中心とするアチックミュージアムの同人らが主に昭和初期に撮影した映像資料である。昨年2013年はその渋沢敬三の没後50年という節目の年であった。また、本書（資料編）におさめられた映像資料は1934（昭和9）年の「薩南十島調査」時のものであり、今年2014年はそれから数えてちょうど80年目にもあたっている。今から80年も前に、前年に初めて就航したばかりの航路で、各分野の研究者を含めた共同調査を組織し、しかも当時最新鋭のカメラと16mm撮影機を用いて、島で暮らす一般の人々の日常生活とモノを記録におさめたという渋沢の記録と収集に対する強い意志は、まさに刮目に値すると言えるだろう。

渋沢自身、自らを一実業家であり研究者ではないとし、「論文を書くのではない、資料を学界に提供する」ことを重要視している。そして、「理論づける前にまず総てのものの実体を掴むということが大変大切」だとし、その生涯で多くの資料集を刊行することで、研究の礎を築くことに精力を傾けてきた。つまり、研究や理論の前提には、まず確固とした資料があるべきで、しかもそれが資料集として広く多くの人に共有されるべきだとするのが渋沢の基本的な姿勢であったと言えるだろう。そのためには、履物の足半をレントゲン撮影してまで記録にとどめ資料化する程に、あらゆる手段と労力を惜しまなかったのである。こうした渋沢の資料とその刊行に対する強い思いの一端でも、本書（資料編）が受け継ぎ共有できていることを願いたい。

また、今回の共同研究において、80年前の「薩南十島調査」で記録撮影された映像資料が、更なる新たな資料化としての展開にも結びついていることも指摘しておきたい。つまり本共同研究では、当時のアチックフィルム・写真を現地で上映し、その上映会で得られた現在の現地の人々による情報と声を新たに映像資料の整理項目に付け加えたのである。当時の写真や動画記録など全く見たこともない現地の人々は、上映会で驚きの歓声を上げながら食い入るように映像を観ていた。なかには、今は途絶えてしまった民俗芸能のかつての姿に注目する人、映像を介してかつての記憶を蘇らせた人なども見受けられた。まさに資料のもつ力、なかでも言葉を介さない映像資料が記憶を掘り起こす媒介となる潜在的な力を有していることを実感した瞬間でもあった。こうして80年程も前の古い映像資料が現代に活かされ、上映会を通じて、あらたに現地の地域社会との接点が生みだされることにもつながっていくのである。本書（資料編）が、渋沢の言う「資料を学界に提供する」ことのみならず、「地域社会にも資料を提供する」というまさに万人にとっての文化資源化に多少でも資することができていれば幸いである。

なお、国立民族学博物館からは、本書におさめられた標本資料写真を提供して頂いた。掲載許可の御礼を申し上げたい。また、本共同研究の調査と本書（資料編）の編集に際しては、国際常民文化研究機構の事務局スタッフ、関係者に大変お世話になった。特に、業務協力者の因琢哉氏と岡田翔平氏には煩雑な資料整理と編集作業を丁寧を担当してもらった。ここに記して深く感謝申し上げたい。